第四回「文芸思潮」短歌賞 発表

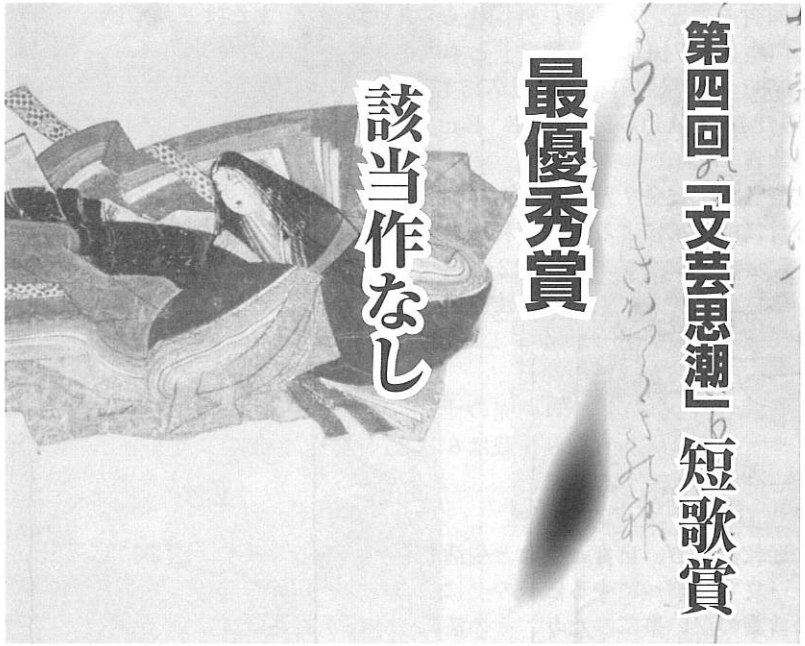
第四回「文芸思潮」短歌賞に御応募くださり、まことにありがとうございました。今回は三九名七八首と少なくなりましたが、日本の伝統に則った自然と人生とに和した叙情歌としての短歌は深みが感じられ、期待に大いに応えていただいている印象を抱きました。厚く御礼申し上げます。

現代の短歌は大手の新聞や商業短歌誌などを見ても、荒廃のうちにあり、正岡子規が提唱した近代短歌から離れて言葉や観念の遊びになっています。これに歯止めをかけるべく、この短歌賞を始めましたが、応募作品の中には、今回も真の短歌精神が生き生きと漲っていることを感じることができました。残念ながら今回は前回に続いて最優秀賞は該当作がありませんでしたが、この息吹のうちにまた優れた歌が寄せられることを次回に期待したいと思います。

集まった応募作の中から、まず予選担当によって第一次、第二次、第三次の選考が行なわれ、それらを通過した作品を対象に、五月六日、福田淑子、五十嵐勉の選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

第五回「文芸思潮」短歌賞は、明年も今年とほぼ同じ要領で募集を行なう予定です。どうぞ奮って御応募ください。

（「文芸思潮」短歌賞選考委員会／文芸思潮）



優秀賞

石井和子（和歌山県西牟婁郡）

新井巳喜雄（埼玉県児玉郡）

渡良瀬愛子（千葉県柏市）

南雲和代（東京都北区）

奨励賞

佐山広平（愛知県春日井市）

風間洋平（新潟県新潟市）

東家芳寛（佐賀県佐賀市）

野葛間（長野県上田市）

平尾三枝子（岡山県岡山市）

葵井禎子（京都府京都市）

緋沙（沖縄県八重山郡）

武藤蓑子（東京都多摩市）

華央子（北海道茅部郡）

室町　眞（東京都町田市）

竹浪和夫（青森県むつ市）

熊倉アンナ（東京都世田谷区）

選評

結晶力不足

五十嵐　勉

第四回の短歌賞は、前回に続いて最優秀賞が出ない結果になった。「深い思いと叙景が密接に絡み合って天に届くような昇華を見せている名歌」を一方で期待しつつ、また一方で、秀歌・名歌は、そう簡単に出るものではないと現実を直視することの繰り返しだが、全体に層が厚くなっていることは、実感できた。ほとんどが三次予選以上のレベルであったことは、それを物語っている。

二年連続で最も最優秀賞に近かった歌は石井和子氏の二首である。

「息づきて村雨はしる山峡をひとりの生はまぼろしに過ぐ」

上の句は、自然の動きのある描写が調べとともに生きていて素晴らしいのだが、後半が抽象、観念に流れ過ぎていて結像の緊密性がやや欠けるのが惜しまれる。「ひとりの生は」は一般的過ぎる。言いたいことはよくわかるし、その内容の深さも確かに響いてくるのだが、後半も具体的な自然描写の中に結晶させれば、秀歌の高さを得ただろう。

しかし九十歳という年齢でこの自然からの感受性は、卓越したものを感じる。もう一つ磨き上げる象徴の高さを得たら、素晴らしい歌群が咲きこぼれるであろう。

同じく優秀賞の渡良瀬愛子氏の

「紫雲英田の風に従ふ花の笑み鋤き込まれゆく今朝の宿命に」

も、耕すその作業によって命を失っていく宿命の前での花の揺らぎが深みを添えているが、ルビの多用が作り過ぎている煩さを感じさせるのが惜しまれた。また「紫雲英」を「れんげ」と読ませるその必然性も、伝わりにくいものがある。

もう一首

「透きとほる山荷葉とう花に遇ふ母とはぐれし霧の山道に」は趣きがあって、前の歌よりも強引さは溶けている。「山荷葉」という花は白い可愛いらしい花で、雨に濡れるとその花びらが透明になる性質があり、これが母が見えなくなったことや霧と絡めて、趣きの重奏を深めている。ただ、よく考え、思いを巡らせないと立ち上がってこない点が、弱点と言える。年々歌が深みを得ていることが進歩を感じさせる。

優秀賞二回目の新井巳喜雄氏は、捨てられた集落の姿を描く短歌に一定の傾向を表して、今回もその世界を謳ってきた。

「金魚のみ空き家の池を泳ぎたり懸樋の滴響く水面を」

廃屋の侘しさと静けさはよく出ていて、人の世の無常は伝わってくるが、いつも同じテーマや題材だと、やや食傷気味になるので、少しは方向を転じてみることも歌の世界を広げることになるのではないか。この題材を続けるとなると、哲学のより深い掘削力が必要となる。次回を期待したい。

南雲和代氏の作は副題に「新潟水俣病」とあるので、それに沿ったものとして読む必要があるのかもしれない。

「阿賀野川下りし船無くふぶく雪シベリアよりの白鳥飛来す」

冬の吹雪の世界にシベリアからの白鳥がいっそう荒涼とした気配を醸して、一つの世界を確かに立ち上げてくる。ただ、それがどう新潟水俣病と結びつくのかは、はっきりしない。雰囲気はあるが、焦点に欠ける。

惜しくも奨励賞に留まったが、佐山広平氏の

「青春の掌に刻まれし女の影悲しみは遠く彼岸花散る」

については、私の評価は高かった。順序を少し入れ替えさせてもらったが、青春への哀惜は、人生への哀惜となっている。「彼岸花散る」の結語は見事である。佐山氏にはこういう歌をどんどん作っていってほしい。

奨励賞の風間洋平氏も陰影の深い老年の悲哀を造形している。

「夜半に起き不随の妻の用足しを見守り終へて虫の音を聴く」

「誕生日の吾に夕餉を寿ぎし妻はまもなく施設へ行きぬ」

この連作は、二つによって互いをより立体的に立ち上がらせ、老年の愛情空間の宿命を響き合わせる一つの世の姿を切り取っている。

東家芳寛氏の「雀の涙」は、自己のもはや避けることのできない病を、雀の涙に託して、その悲しみを歌う詠嘆は、真っ直ぐ迫ってくる。

「啼きにける雀の涙落ちつらむ我の病の不治なりしゆえ」

は、その内側に抑えている悲嘆が凝縮され、一つの結晶にまで高まって雀の涙を光らせてくる。雀に託すことによって命の尊さを歌い上げる詠嘆は、普遍的な力として広がっていく。

野葛間氏の

「痩身の君がこほれるみづうみを試歩なすごとし夜の病棟」

は、病院での深夜の歩行の危うさをむしろ比喩の世界を拡大して儚さを露出させたプリズムのような、分光展開に妙がある。

同じ病院でのドラマを歌ったものに、平尾三枝子氏の

「告げられし夫の病名反芻し呑み込むまでを指先みつむ」

がある。リアリティのある描写は、迫ってきて、重みがある。

また老後の苦衷を乗せたものにもいい作かあり、竹浪和夫氏の

「妻病めば途方にくれて菜を刻む厨（くりや）にわれは背を丸くして」

も、普段は台所に立ったこともない男性が、妻の病によってあらためて妻の立場に立たされ身の行末を想う当惑がよく出ていて、生活感が匂っている。

回顧の領域も、老年では豊かさを増してくる。

「旧友の次々に逝き老沼で〝水切り〟すれど石は弾まず」

室町眞氏は、小説では銀華文学賞の優秀賞を受賞して居る実力者で、それなりに過去への思いは表出されているが、「老沼」という言い方にやや作為の固さがあり、現実と溶け合っていない流れのぎこちなさがある。

「学び舎に響きしシュプレヒコールは耳孔の奥に葬り去られ」も、むしろ耳の奥に時として鳴り響いてくる方が、回顧の意味が深くなるだろう。もっと青春の意味を鋭く問いつつ表現を磨いていけば、光を増していくものと思われる。

少し直せばさらによくなるだろうと想われるものも多かった。むしろ改作を期待して奨励賞とした経緯もある。

武藤蓁子氏の

「覚めてなほありありとして故郷の螻蛄（けら）の鳴く野の夢から出られず」は、深奥に眠る故郷の地が現在に湧出してくる生きて居る過去の生々しさがよく出ているが、「覚めてなほありありとして」と「夢から出られず」は重複している。

華央子氏の

「草萌の光る小径を行く吾に枝の子栗鼠のするりと去りぬ」は、全体的に雰囲気はあるが、何を歌いたいのかはっきりしない。前半はいいが、後半に決めがない。「子栗鼠」は「小栗鼠」か。「するりと」はおもしろいが、それに奪われて、小径の静寂を表したいのか、焦点が結ばなくなった。

「岩穴の即身仏の御前に雫の音色はらわたに染む」

という葵井禎子氏の歌には、「古知谷阿弥陀寺」という添え書きがあるが、「はらわたに」という部分が厳かなムードと離反する。「耳奥に響く」とか、「胸底を打つ」とか、工夫が必要だろう。

熊倉アンナ氏はポーランドに母親がいるとのことで、一時イギリスへ発つ日を歌った

「出発の日は雪予報つぼみまで遠い桜をあとに残して」

は、説明を受けるといいのだが、その状況がわからないと伝わってこない欠点がある。

「わたしには戦いをとめる手立てなく母の祖国にミサイル落ちる」との関連によってやっと補えるので、この立場を理解させる何か補助のような仕掛けが必要だろう。

朝日歌壇や読売の歌壇でも、日本人が詠んだウクライナ戦争への反戦歌は掃いてまとめて捨てたくなるような似非同情歌がいっぱいある。この歌もそれらと混同される弱さがある。具体的な言葉に沿って、主体的な強さをもっと出し、当事者としての心を剥き出しにする表現が必要だろう。いずれにしても戦争を歌にするのは、平和のなかで自然を凝視することよりも遥かに難しいことを自覚しておかなければならないだろう。

日本の短歌は、いま危機に瀕している。全国紙の歌壇はどこも歌になっていないヘラヘラ紛い歌がほとんどで、人間の真情を深く高く歌い上げた短歌は姿を消している。まともな感受性を示している歌はどこへ行ってしまったのか、自分の生活や人生を深く見つめて生を問う近代短歌はどこへ消えてしまったのか、嘆かずにはいられない。

しかしかろうじてこの「文芸思潮」に集まってくる短歌には、その方向が見える。まだまだ未熟の観があるが、ここに希望を託すしかない。あと、地方の、斎藤茂吉の脈流を引き継ぐ誌の周囲にはその伝統の力が残っているように見受けられる。スマホやインターネットなど便利機器に毒されない、自然や命と真剣に向かい合う真の短歌が生み出される可能性はまだ大きく残っている。そこに期待したい。状況を見つめ、それを自然の中で生きる命に問いかけて、その声を聞くことは、未来への力でもある。言葉が腐れば文化も腐る。文化が腐れば未来は腐る。文芸復興の意味はそこにある。

五十嵐　勉

いがらし　つとむ

1949　山梨県生まれ

79「流謫（るたく）の島」で群像新人長編小説賞受賞

98「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンテック主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞

2002「鉄の光」で健友館文学賞受賞

15より歌人越山しづかの勧めで短歌誌「美知思波」入会

佳作

三井瑛子
岡田美幸
陶久　要
柊　二郎
岩谷隆司
海神瑠珂
高橋　良
宮脇すみれ
川名　滓
三ッ木健
械冬弱虫
南　大希
上野卓男

入選

東横恵愛
東風佳子
坂井　傑
山本　明

「同時代人」への手紙

福田淑子

私たちは日々、泡のごとく立ち上がりくる思いの丈を韻律にのせて詠うという文化をもち、千年もの間、和歌という表現形式を手放さずに短歌を育んできた。人間がことばを発するようになって以来、リズムを持った詩のような表現が成立するまでにどのくらいの年月を要しただろう。一度手にした歌は、私たちの人生の伴走者としてもはや手放すことはできない。もし、ＡＩの発達で、人工頭脳のほうが人間よりうまい俳句や短歌を作るというようなことを言い出したら、もし名歌をＡＩに作らせようというような目論見を持つことがあったら、その後の世界では間違いなく人間の心は退化していくに違いないと思う。

人は自分に降りかかる悲しみや苦しみの体験を、それぞれのかたちで引き受け、どうにかこうにか己というものを保ちながらやり過ごさざるをえない。生まれ出て死ぬまでの間に何の不運にも遭遇しないまま、こともなく天寿を全うするなどという人は、ごく稀であろう。長く生きていれば、いろいろなことがある。そんなことを百人百様に語りかけてくれるものの一つが短歌である。様々な人生へ慈しみが言葉を尽くした歌の調べによって伝わり、読む側にしみじみとした共感が湧いてくる。色々なことを凌ぎ、感受しながら生きている同時代人がいる。そのようなことを感じさせてくれる作品を次に抽出した。

哀しむにあらざるものをさりながら春あけぼのの抱卵の鳩　石井和子

鳩が卵を温め、雛がかえるように抱卵している光景はほほえましく喜ばしいはずである。私たちも新しい生命の誕生を願い、喜び、そして幼い命を慈しむ。しかしこの歌の上の句は「哀しむにあらざるものを」と、まるでそれは哀しいことであるかのようである。生きとし生けるものの生命の誕生、この世を生きることには悲しみも伴う。命を育むことは、哀しむものではないだろうがそうはいうものの命には哀しみもつきまとう。だが、春あけぼのの光は美しく、卵を抱くものを慈しみ祝福する。そうして私たちはここまで命を繋いできたのだから。抱卵の鳩という名詞止には深い余情が感じられる。「哀しむ」にルビがあるが、それは不要である。作者は九十歳である。これまでにどのような人生を歩まれたのだろう。命に対する深い洞察と慈愛がしみだしてくるような一首である。

表札に最後の主の名を残し家は朽ち果つ樹木の中に　新井巳喜雄

限界集落だろうか。いや、最近は街中にも相続人不明の空き家が朽ちて放置されていると聞く。樹木の中に立つ空き家であるから、これはそれなりの屋敷なのであろう。最後の住人の表札がまだそこにあることで、その荒れ廃れた家が、かつて主人が健在だった頃の活気のある家の様子を彷彿とさせて、一層寂しさをともなって朽ち果てた家が提示される。現在と過去の対比がみごとに映し出されて、そこに流れた時間を詠み込んだ一首である。

透きとほる山荷葉とう花に遇ふ母とはぐれし霧の山道に　渡良瀬愛子

霧の山道で母親とはぐれたのはいくつの作者だろうか。いくつであれ、山道で連れとはぐれれば、不安と孤独に陥るだろう。幼い頃であればなおさらだが、「透きとほる花」に出会ってそれに心を奪われている間は、霧の山道にあっても至福の時であろう。人は花に救われることがある。山荷葉は得も言われぬ美しい花である。霧の中から浮かび上がった黙して可憐に咲く白く透明な山荷葉は、作者には天使に見えただろうか。山野草が世界にあることを感謝したいと思う。花に慰められることは多いと改めて感じ入る。人と自然のハーモニーが美しい。

阿賀野川下りし船無くふぶく雪シベリアよりの白鳥飛来す　南雲和代

阿賀野川は福島県に源流を持ち、新潟県を通って日本海に流れ込む川である。雪がふぶく中、シベリアを思い起こす白鳥が飛来してきたのだろう。寒々とした光景である。下る船も今日は見えないと詠うことによって、さらに寒さ厳しい情景が強調されている。そういえば、阿賀野川は新潟水俣病で知られた水銀汚染を経験したところである。作者は映画「阿賀に生きる」を観たのだろうか。対で「日常と不在を見つめ監督逝きぬ公害の阿賀雪降りやまず」の一首もあったが、掲出歌のほうが一首独立して鑑賞できる。

山間のつばな眞白き原に坐す雪降らぬ地に久しく住めば　緋沙

かつては雪の降り積もる土地に暮らしていたのだろう。今は、雪の降らぬ地に久しく住み続けている。雪の降り積もる土地の生活はなかなか辛いものと聞く。だから、豪雪の地の友には雪の降り積もらない地の暮らしは極楽と言われる。しかし、年を経てかつての雪の降り積もる地もなつかしい。一面の白銀。それをつばなの咲く野原で思い出している。つばなはチガヤとも呼ばれ一面の白銀の穂が雪のようである。作者は今年九五歳。「久しく住めば」の表現からその人生の時間の流れが感じられる。「山間」にルビは不要だが、ふるのであれば「やまあひ」であろう。

痩身の君がこほれるみづうみを試歩なすごとし夜の病棟　野葛間

親しい人が病床にあるのであろう。痩せて足の衰えた姿で、まるで凍った湖の上を歩いているようなおぼつかない足取りで恐る恐る試歩する姿。その姿を今にも割れるかも

しれない湖の氷の上を行くと比喩したところが秀逸。ただ、第五句が「夜の病棟」で終わるとそれ自体が余韻を持ってしまって、夜の病棟に視点が落とし込まれる。痩せた君がこほれるみづうみ」も「試歩なすごとし」も、すべてが夜の病棟の比喩なのかとも読めてしまう。語順にもう少し工夫がいるのではと思うのだが。

覚めてなほありありとして故郷の螻蛄の鳴く野の夢から出られず　武藤蓑子

人は様々な経験をし、多くのものが記憶の層に堆積している。夢とは不思議なものだ。思い出したくて手繰り寄せているわけではないのに、何度も何度も表層に浮かび上がってくるという光景があるものだ。夢であるから、なぜなのかわからないが、覚めてなお夢の中に取り残されているような、そこに佇んだままでいたいような光景なのだろう。

樺太へ征きたる叔父の帰還待ち陰膳供へし祖母を忘れず　竹浪和夫

大戦終結後、戦場から戻ってこなかった身内を持つものは少なくなかっただろう。長い間帰還しない人の無事を祈って膳を用意することを陰膳というが、この叔父もついに戻ってこなかったのだろうか。戦争の犠牲者は爆撃を受けた人々や、戦場に駆り出されたものだけではない。大切な人を戦場に送り出す人も、戦士の報を受け取る家族もそのひとりなのだ。そんなことを今、改めて思い知らされる。

岩穴の即身仏の御前に雫の音色はらわたに染む　葵井禎子

なにを願って即身仏になられた仏だろうか。そんなことを思うと即身仏の鎮座する岩穴に滴り落ちる雫の音は格別に響くことだろう。そんな感慨の瞬間をとらえたところは印象的だが、「はらわたに染む」はいささか表現が直截にすぎないだろうか。

夜半に起き不随の妻の用足しを見守り終へて虫の音を聴く　風間洋平

不自由な体の妻が用足しをするために夜半につきそう手持無沙汰の夫に、外の虫の音が音楽のように響き、思わず耳を傾けている。見守り終えてその豊かな秋の音色に改めて聞き入る。秋の夜半の虫の音を背景に、老いた夫婦の情というものの有り様がしみじみとした光景とともに浮かび上がってくる。

告げられし夫の病名反芻し呑み込むまでを指先みつむ　平尾三枝子

にわかには呑み込めない病名、よもやうちの人がと、戸惑う。それを事実として受け止めるのには、かなりの逡巡と当惑があっただろう。その心の様子を「反芻す」と表現したのが、共感を呼ぶ一首である。

啼きにける雀の涙落ちつらむわれの病の不治なりしゆえ　東家芳寛

これもつらい心境の歌である。不治の病と聞かされた時の愁嘆はことばにならない。雀の啼く声も哀しく聞こえる。雀よ、涙してくれ、きっと共に心を痛めてくれることだろう。雀の鳴声が妙につらく聞こえてくる一首である。

青春の掌に刻まれし女の影悲しみは遠く彼岸花散る　佐山広平

青春の日に出会った忘れられない人がいる。悲恋であるか、別離であるか、青春という時代の記憶は格別なものである。彼岸花の散る頃、掌に残る記憶は影のようにその人を呼び起こす。

母斃れし長月のまた巡り来て庭にコスモス数多咲きたり　海神瑠珂

母が斃れたのがコスモスの咲く季節なので、コスモスが咲くと、自然と母を思い出すということだろうか。「斃れし」は亡くなったということを表しているのだろうが、コスモスの花と母との関係は、なども少し歌の焦点を定めてはどうだろうか。ところで「斃れし」にルビは不要だがふるのであれば「たふ・れし」であろう。

総評

身近なものへの慈しみ、過去の思い出、現在を生きるじたばたなど、作品の中の固有の世界が、韻律を持った言葉によって開かれる。詠むもの、読むものの意識が交差して共感しあう、そのような貴重な時間が短歌のなかに編み込まれている。わが思いを乗せて他者に届ける短歌の形式にはやはり昔から大切にしてきた「よい歌」の約束事がある。

例えば、五七五七七の枠内に収め、かつ韻律を伴う表現であってほしい。歌は読み手に取って意味不明なものであってはならない。辞書で引けばわかる漢字にルビを振らない、また、勝手な読みをルビで指示しない。歌は「われ」の視点を大切に、調べに個性がない徒事歌にならないようにする、などなどである。歌を仕上げる際に、もっと丁寧に推敲していただければ、こちらがさらに深く受け止めることも可能な作品もあったのではないかと思う。次回にさらなる佳作を期待したい。

福田淑子
ふくだ　よしこ
1950　東京都生まれ
2003　短歌評論「馥郁たる叛逆―斉藤史論」で第70号『文芸埼玉』評論部門入選
07「孤独なる球体」で第8回大西民子賞受賞
18　歌集『ショパンの孤独』で第13回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門優秀賞
短歌誌「波濤」を経て、現在短歌同人誌「まろにゑ」・現代短歌〔舟の会〕、俳句同人誌「花林花」所属　俳句誌「架け橋」会員

第四回「文芸思潮」短歌賞

優秀賞

息づきて村雨はしる山峡（やまかひ）をひとりの生はまぼろしに過ぐ

哀しむにあらざるものをさりながら春あけぼのの抱卵の鳩

石井和子

受賞の言葉

定型韻律詩の恩寵に、本賞の恩寵まで戴き、誠に有り難く感謝申し上げます。

私は当初からの五十嵐編集長の「短歌季評」に深く感銘。短歌の救世主がおられると真実嬉しく傾倒し投稿したくなり、今日に至っております。散文では表せない韻律の霧に、老いのあと僅かな時間を集中させたいと思います。

石井和子

いしい　かずこ

1932 高知県生まれ
高知県立第一高等女学校卒業
63 短歌結社「原型」入会
第１回原型賞受賞
角川「短歌」二十首競詠一席受賞
81 歌集「花絡」出版
90 短歌結社「登花歌人会」結成
2004 歌集「幻有」出版
「登花歌人会」主宰
和歌山県歌人クラブ名誉会長

紫雲英（れんげ）田の風に従ふ花の笑み鋤き込まれゆく今朝の宿命（さだめ）に

透きとほる山荷葉（さんかよう）とう花に遇ふ母とはぐれし霧の山道に

渡良瀬愛子

受賞の言葉

御誌の伝統短歌への理念に賛同し、熟考の上応募致しました拙歌をお取り上げ賜り、誠に光栄に存じます。有難うございました。

敗戦時に存亡の危機であった短歌を守るために結集した先人の方々を思う時、浅薄なノンアル短歌から早く脱却し、オークの樽香漂う熟成歌を目指さなくてはと考えますが、自分で歌を詠むだけでなく、他の皆様の作品をゆっくり鑑賞させて頂くのも私の楽しみの一つです。

渡良瀬愛子

わたらせ　あいこ

1959 群馬県桐生市生まれ
千葉県柏市在住
歌人花山多佳子に師事
第２歌集『水晶のしづく』にて第21回島木赤彦文学新人賞受賞
日本歌人クラブ会員
島木赤彦研究会会員
第３回文芸思潮短歌賞にて奨励賞受賞
第148回明治神宮春の大祭奉祝短歌大会にて特選
著書『ルビーの記憶』『水晶のしづく』

優秀賞

表札に最後の主の名を残し家は朽ち果つ樹木の中に

金魚のみ空き家の池を泳ぎたり懸樋の滴響く水面を

新井巳喜雄

受賞の言葉

短歌を投稿してしまえば、ひたすら結果を待つのみであり、作品の持つ運命に任せるしかない。投稿までに、いかに力を尽くしたかが、全てである。

その意味で、毎回的確な批評をしていただき、勇気づけられた五十嵐勉氏の御蔭で、今回受賞できたことを、深謝申し上げます。

短歌を作る者に、ゴールはありません。弛みなく学び、作り続けるチャンスをいただいた、御縁と出会いに感謝しつつ、さらに一歩を進めたいと思います。

新井巳喜雄

あらい　みきお

1953 埼玉県生まれ
1978 立正大学大学院文学研究科修士課程終了
高校教師を経て、作歌活動に専念
著書に『井上靖　老いと死を見据えて』（近代文芸社）、『私の上に降る雪は』（ほおずき書籍）、『井上靖と信州』（新風舎）などがある
第 16 回『私からあなたへの万葉集』大賞
第 24 回『さくらのうた』さくら賞
第 13 回角川全国短歌大賞都道府県賞受賞

阿賀野川下りし船無くふぶく雪シベリアよりの白鳥飛来す

南雲和代

受賞の言葉

この度は、第４回「文芸思潮」短歌賞の優秀賞という身に余る賞を頂きまして、誠に有難うございました。短歌の実作を始め、僅か数年という未熟な私の作品に対しての賞にお礼の言葉もありません。まもなく、古希を迎えようとする私にとりまして、大きな励みになりました。今後とも日々、努力していきたいと思っております。

南雲和代

なぐも　かずよ

1954 年生まれ
新潟県出身
東京都在住
金沢大学大学院文学研究科修了
日本現代詩人会／日本詩人クラブ会等会員

奨励賞

痩身の君がこほれるみづうみを試歩なすごとし夜の病棟

野葛間

のくずま
1988年生まれ
学習院大学文学部卒業
2021第17回「文芸思潮」現代詩賞奨励賞
『講談社文芸文庫』2000字書評コンテスト優秀作「あなたは倉橋由美子を知っているか？毒薬としての文学」
短篇小説『フリルと焼け野原』(朗読：山本彩)
2022第3回「文芸思潮」短歌賞奨励賞

学び舎に響きしシュプレヒコールは耳孔の奥に葬り去られ

室町　眞

むろまち　しん
群馬県高崎市生まれ
法政大学文学部・日本文学科卒業
2010　長塚節文学賞優秀賞
2013　銀華文学賞河林満賞
2019　藤本義一文学賞優秀賞
2021　銀華文学賞優秀賞　ほか
「小説と短歌の融合」を企図し、昨年よりぽつりぽつりと短歌を作り始めました。

覚めてなほありありとして故郷(ふるさと)の螻蛄(けら)の鳴く野の夢から出られず

武藤蓑子

むとう　みのこ
東京都多摩市在住
2008　第4回エッセイ賞優秀賞
09　第5回エッセイ賞当選
10　第6回エッセイ賞特別賞
13　第9回エッセイ賞奨励賞
14　第10回エッセイ賞奨励賞
15　第11回エッセイ賞奨励賞
20　第一回短歌賞奨励賞
22　第17回エッセイ賞奨励賞

草萌の光る小径を行く吾に枝の子栗鼠のするりと去りぬ

華央子

かおこ
1954年生まれ
北海道に暮らして約17年　この地で短歌、俳句、詩作などに励む
文芸思潮　第2回短歌賞優秀賞
文芸思潮　第3回短歌賞奨励賞

奨励賞

青春の掌（て）に刻まれし女（ひと）の影悲しみは遠く彼岸花散る

佐山広平

さやまこうへい
1934年生まれ
国立愛知学芸大学国語科卒業
愛知県立高等学校の教諭として６校を歴任
「文芸思潮」現代詩賞当選・優秀賞２回
2010「文芸思潮」現代詩人賞受賞
詩集「散乱する実在に」（近代文芸社）
詩集「時の彼方に」（アジア文化社）
詩集「水の流れに」（アジア文化社）
詩集「実在の岸辺に」（アジア文化社）
評論集「文学論―表出への実存主義」
（近代文芸社）愛知県春日井市在住

啼きにける雀の涙落ちつらむ我の病の不治なりしゆえ

東家芳寛

とうや　よしひろ
1990熊本大学大学院修了
2019から2022年まで「ひのくに」所属
現在無所属

誕生日の吾に夕餉を寿ぎし妻はまもなく施設へ行きぬ

夜半に起き不随の妻の用足しを見守り終へて虫の音を聴く

風間洋平

かざま　ようへい
1942新潟市秋葉区生まれ
1961年　新潟県立新潟商業高等学校卒業
地元地方銀行勤務
2011短歌結社「くろ土」に入会
2018「くろ土」会長に就任
2023「にいつ文芸協会」副会長に就任

告げられし夫の病名反芻し呑み込むまでを指先みつむ

平尾三枝子

ひらお　みえこ
1944年生まれ
66　岡山大学卒業
2014　から作歌開始
19　NHK全国短歌大会近藤芳美賞受賞ほか
岡山市在住

奨励賞

妻病めば途方にくれて菜を刻む厨にわれは背を丸くして

竹浪和夫

たけなみ　かずお
1946 青森県むつ市生まれ
69 弘前大学教育学部卒業
以後青森県内小中学校に勤務
2007 むつ市立第二田名部小学校長で定年退職
文藝同人雑誌「下北文化」及び、青森ペンクラブ会員
著書「評伝鳴海要吉」、「秘本東北太平記とその背景」

岩穴の即身仏の御前に雫の音色はらわたに染む

葵井禎子

あおい　さちこ
1963 年生まれ
主婦兼夫経営の会社手伝い
元看護師
第 12 回「文芸思潮」エッセイ賞奨励賞
第 3 回「文芸思潮」短歌賞受賞

山間のつばな眞白き原に坐す雪降らぬ地に久しく住めば

緋　沙

ひさ
95 歳
沖縄県八重山郡在住
主婦

出発の日は雪予報つぼみまで遠い桜をあとに残して

熊倉アンナ

くまくら　あんな
1978 年東京生まれ　母親がポーランド人
ヨガインストラクター
この 2 月世田谷区から期間限定でロンドンへ

現代語訳

四たび歌よみに与ふる書

連載第四回

正岡子規

拝啓。空論ばかりでは理解しがたいので、実例について批評せよとのお言葉、ごもっともと存じます。実例と言っても際限がないので、どれを取り上げて批評すべきだろうかと惑いますが、なるべく名高い人から試みてみましょう。柿本人麿の

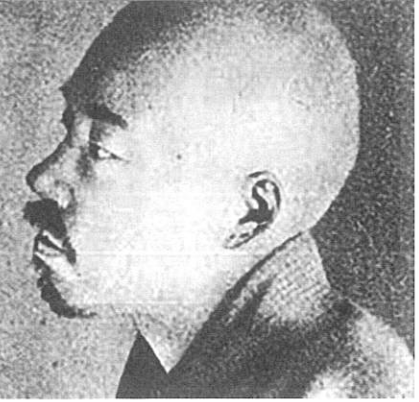
もののふの八十氏川の網代木にいざよふ波のゆくへ知らずも

という歌がしばしば引き合いに出されるようです。この歌は万葉時代に流行した一気呵成の調べで、少しも野卑なところはなく、字句もしまっておりますが、全体的に見ると上三句は無駄なものになっています。同じ人麻呂の「足引の山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を一人かもねむ」の歌は、前置きの詞は長いのですが、この歌は前置きの詞が長いことによって、夜の長いことを感じさせます。しかしこの「もののふ」の歌は、上三句がまったく役に立っていません。大勢のもののふと宇治川を掛けているので、宇治川という名所をよく歌ったものとされていますが、この歌を名所の歌の手本として引用するのは、大たわけです。総じて有名な地の歌というのはその地の特色がなくては叶いません。この歌のように意味のない名所の歌は、名所の歌にはならないのです。しかしこの歌は、後世の俗気がぷんぷんとした歌に比べればはるかに勝ります。かつまたこの種の歌は真似をすべきではありませんが、俗物歌の多い中に一首か二首あるのは、おもしろいかもしれません。

月見れば千々に物こそ悲しけれ我身一つの秋にはあらねど

という大江千里の歌は、最も人々が褒めている歌です。上三句はすらりとして難はありませんが、下二句は理屈であり、蛇足です。歌は感情を述べるものであるのに、理屈を述べるのは歌の本質を知らないゆえではないでしょうか。この歌の下二句が理屈であることは、消極的に終わっていることからも知ることができます。もし「わが身一つの秋と思ふ」と詠むならば感情的ですが、「秋ではないが」と当たり前のことを言っているので、理屈に陥ってしまっているのです。このような歌を「よい」と思うのは、その人が理屈から離れることができないためです。俗人は言うに及ばず、今の時代のいわゆる歌よみどもは、多く理屈を並べて楽しんでいるのです。厳格に言えば、これらは歌でもなく、歌よみでもありません。

芳野山霞の奥は知らねども見ゆる限りは桜なりけり



正岡子規

この歌は八田知紀の名歌とか言われております。知紀の歌集はまだ読んだことがありませんが、これが名歌ならばおおよその底は見え透いております。これも前の歌と同じく「霞の奥は知らねども」と消極的に言っているのが、理屈に陥っています。「霞の奥はわからないけれども」とすでに言っているのに、さらに「見ゆる限りは」と加えて、「見えないところはわからないけれども」と重ねているところが、下手というものでしょう。しかもこの歌の姿については、「見ゆる限りは桜なりけり」などと表現しているのもきわめて拙く、野卑です。前の大江千里の歌は、理屈こそ悪いものですが、姿は、はるかに立ち勝っています。ついでに申し上げると、消極的に言えば理屈になると申し上げたこと、いつでもそうなるというものではありません。客観的景色を連想していう場合は、消極的でも理屈にはなりません。例えば「駒とめて袖うち払う影もなし」と言っているのは、客観的景色を連想しているまでで、このように言わないと感情を表すことができないので、理屈に陥ってはいません。また全体が理屈めいている歌もあり（釈教の歌の類）、これらはかえって言い方によって多少の趣味が添うのでしょうが、この芳野山の歌のように、全体が客観的景色であるのに、その中に主観的理屈の句が混じっては、殺風景なことと言わざるをえません。

また同じ歌人の歌と思いますが、

うつせみの我世の限り見るべきは嵐の山の桜なりけり

という歌もやはりこの例です。さてさて驚き入った理屈の歌です。嵐山の桜が美しいと言うのは無論客観的なことであるのに、それをこの歌は理屈で表しているのです。この歌の句法は全体的に理屈の趣向の時に用いるべきなのに、この趣向の如く、客観的に言わなければならないところにこんな理屈を用いてしまっているのは、大俗のしわざと見えます。「べきは」と係けて「なりけり」と結んでいるところが、最も理屈的殺風景になってしまっています。一生嵐山の桜を見ようというのも、変なくだらない趣向です。この歌、全く取るところがありません。

今後も手当たりしだい申し上げていきましょう。

（明治三十一年二月二十一日／『日本』掲載）

〈現代語訳／五十嵐勉〉

※八田知紀 1863年（文久3年）薩摩より郁姫の入輿に伴って近衛家に仕え、勤王運動にも関わった。明治維新後、神祇省と文部省を兼務し、1871年（明治4年）宮内省に出仕した。翌年歌道御用掛を命じられ、宮廷歌人として活躍した。当時の最も権威ある宮廷歌人であった。

文芸思潮短歌季評

前号まで、新聞の歌壇を主に見てきた。主要紙に取り上げられる歌の低俗さに、あらためて日本の短歌の劣化を感じたが、では主要短歌誌はどうなっているのか、これからいくつかそちらの方面を見ていきたい。

角川の「短歌」二〇二三年六月号には巻頭作品として、平井弘、沖ななも、小島ゆかり、川野里子などの二十八首ずつが載っている。私はこれらの歌人を知らないし、これまで一度もその短歌に触れたことはないが、日本の短歌の伝統を担う角川の「短歌」なら、相当なレベルの歌が載っているだろうと、期待してページを開いた。

最初は平井弘の「羊をいっぴき」と題する歌群である。この指とまれのこのゆびなら握つてをりましたがはいそれはもう

古いことは別として覚えてゐるやつがゐなくなるのがいまごろ

夏草や誤りにきづいたところでそこそこ落ちつくものですが

これは何だ？　と、目を疑う。まさに目が点になってしまった。これ、短歌？　まさか角川の「短歌」がこんなものを巻頭歌として載せるの？　驚き、呆れてしまった。論評するのも言葉が汚れる。こんなひどいものが二十八首延々と続く。読んでいられない。

二番目は沖ななも（熾）の「残る桜」と題する歌群。

はばからず水面に枝をさしかわしはばからず咲く今年の桜

「散る桜残る桜も」明日までは散らずかがよう風にまかせて咲いただけの数は散るゆえさくらばな朝の歩道を埋め尽くしたり

桜を愛でてその美しさを表すのに、こんな貧弱な表現しかできないのか、あなたの命の感受性はこんなものか、と侮蔑せずにはいられない、拙劣な歌で、これも読み続けていくのに堪えない。「はばからず」を二度も遣っているその技巧の貧しさにも呆れるし、三首目の「咲いただけの数は散るゆえ」って、桜は算数じゃないんだよと、小学生からも言われそうな発想の惨めさには、目も当てられない。

三人目は「いま風の向きが変はつて」と題する小島ゆかり（コスモス）の歌群。

パルテノン神殿を空は記憶して量子コンピューターの世界を照らす

コンビニは途方に暮れて灯りをり古代のさくらふる夜のなかありしともあらざりしともさまざまのこと　思ひ出はさくらと同じ

わかったような、わからないような歌を作って、その韜晦さの中に逃げ込んで下手な趣きを出そうという魂胆が見

え透いている。量子コンピュータなんてほんとうにわかってんの？　と言いたくなる。「思い出はさくらと同じ」だったら言う必要はないんじゃない？　とも。

川野里子（かりん）の「解体」。これは福島の津波による原発事故を素材にしているらしいが、重みは感じるものの、このような大災害をなぜ歌によって表現しなければならないのか、その必然性が感じられない。

黒瓦の屋根もりあがり反りうねり銛を打たれし鯨の形

消えた家生きている家死んだ家福島の町に早春の光

プランターのチューリップ赤しここになほ暮らしはありて玄関の前

原発に正面から向かい合うには言葉の深さ、鋭さ、怒りが足りない。所詮は他人事の災害歌に留まっている。

あとは似たり寄ったりの短歌誌になっているので、これ以上は見ないが、結局このレベルが現代の日本短歌の一つの指標だとすると、まったくもって心許ないことがよくわかった。日本短歌中央歌壇の斜陽劣化をよく象徴している。

あと、この号では釈迢空（折口信夫）に因んだ迢空賞が発表されているので、それに触れたい。

この賞は水原紫苑の歌集「快樂」に与えられたものだが、内容は先の四人よりもはるかによい。

紫のきはまるところ藤ならむ欲望の房長く垂れ嘔吐を誘ふ

ちちははの交はりを見し十歳のわれは極光放ちたりけむ

金雀兒にふれむとせしが夭折の俳優なりき衣装のままに

これらは深いことは深いのだが、内面に潜む醜悪な部分を露出して、それを詠じてリアリズム的掘削によって太く濃い陰影を出そうとするところに、昇華から離れた濁りを感じる。それがさらに政治的なこと、歴史的なことに及ぶと歌から離れた余計な屈折が目立って鬱陶しく感じられる。

昭和天皇いまだ裁かれずその裔を崇む不条理、太陽のごと

共和国につぽんが來むその日までいのち在らむかわれも短歌も

こんなことを短歌で言ってもしかたがないだろうと、思想も戦争への見識も首を傾げたくなる。これらが歌集全体を損ねていて、不協和音を奏でている。もともと短歌はその天皇家が基盤となって伝統を作ってきたことはどうなるのか、足元にも危うさが感じられる。私には、高橋陸郎の歌の方が地についたものと感じられた。

この迢空賞の選考委員を見て驚いた。佐々木幸綱、高野公彦、永田和宏、馬場あき子の四人は朝日日曜歌壇の選者ではないか。そっくりそのままの人が並んでいる。朝日歌壇のひどさにも呆れ果てたが、その四人がまたこの賞の選考委員になっていることにも、驚きと失望を禁じえなかった。いささかこの「まほろば」の誌にも縁のある折口信夫が現状を見たら、どう思うだろうか。

（五十嵐勉）